2000・下水文化研究フォーラム　〝これからの人と水とのかかわり〟

問題提起・人と水との距離の遠隔化は何をもたらしたか？

流通科学大学　酒井　彰

では、萩原先生のご講演を受けまして、ただ今から、下水文化研究フォーラムを開催したいと思います。本日のフォーラムは、問題提起で始めまして、四名のご講演者の方にそれぞれのお立場から人と水とのかかわりに関するお話をいただこうと思います。

まず、私の方から、なぜこういったテーマを選んだのかということについてお話させていただきます。問題提起のタイトルとしては、「人と水とのかかわりの希薄化は何をもたらしたのか」としておりますが、今都市化環境の中で生活している都市生活者は、水から得られる恩恵だけを受け取っていながら、水のことについてほとんど関心をいだかない、関心が希薄化しているように思います。普段から水資源のこと、例えば、今生活で使っている水がどこから来て、使った後どうなっているのか、そういったことを普段考えている人はほとんどいないと思います。都市の水循環というのは、自然の水循環に人がいろいろと働きかけて、言ってみれば都合の良いところだけ利用しているわけですが、そうした資源をもたらす自然との関わりをあまり考えていないように思われます。都市生活者の多くは、上下水道などの都市装置を単に利用するだけになってしまっていて、本来であれば、このような都市装置は共同で利用しているはずなのに、個人個人が勝手に、利己的に

利用しています。また、都市装置がどうなっているのかという姿が見えにくいということもあろうと思います。

一方で、都市生活者は、普段から被害を受けているというわけでないのでしょうが、さまざまな代償を払ってきているのではないかと思われます。そのひとつの例は、今萩原先生からお話がありましたように、多くの水辺が失われ、それとともに都市のなかで潤いのある空間が失われてきたことではないかと思います。今、都市のなかで、人間が人間らしく生活するために欠けているものをあげるとすれば、枚挙にいとまがないほどだと思われます。そうした代償を払わされているにもかかわらず、多くの住民は、文句も言わずにそのことを容認してきたということが言えるのではないかと思います。この容認してきたということと、先ほどの無関心ということはきっと意識のなかでつながっていると思います。

今、いろいろな問題があるなかで、都市生活者は無関心のままで、問題解決は専門家にオマカセするだけでは、水環境は取り戻せませんし、萩原先生の講演のなかのことばを借りれば都市における環境創生などということも、誰かに任せればできるわけではないでしょう。つまり、他者依存だけでは、潤いのある清らかな水環境を守り、次世代へ継承していくことは難しいと思われます。

昨今、雨水利用を行えば良いとか、雨水は浸透させましょうといったことが言われており、このような方策をとるべきだという議論はあるわけですが、そのためには、十分な情報が共有化されることが必要になります。しかし、他人任せの意識では、情報を共有することもできません。住民参加型の方策が浸透するためにも、その条件として、今一度人と水との関わりを再考しなければ、多くの都市生活者が参加することにはならないだろうというのが、本日のフォーラムの主旨であ

り、企画した背景になっております。

次ページの図は、少し複雑になってしまいましたが、これまでの都市は、利便性・効率性を優先してきました。例えば、水に関しても、活動に必要な水は自然から、とくに大都市圏では遠方の他流域からも導水し、使ったあとの不要な水や使えるのに使わない水、すなわち汚水や雨水については、もっぱら排水することに特化した都市になってきています。こうした排水機能を下水道が主に担ってきたわけですが、排水に特化してきたということは、環境にもインパクトを与えますし、水辺も不要なものとして喪失してきてしまったことにつながります。

社会と自然環境の関係は、社会が自然から恵みを受け、社会のなかでの活動の結果が、本来であれば自然に還元されるということでなければならないのに、この図は自然環境を単に捨て場所にしてきてしまったことを示しています。資源の供給源を捨て場所にしてしまってきたわけです。こういう現在の都市の構造が、都市生活者の意識の構造を形成してきたのではないかと思います。

図の下のほうにこうしたことをまとめています。繰り返しになりますが、無関心がリスクを認知しにくい都市構造を許容し、都市装置の管理を専門家に全面的に依存するということが無関心を助長する、この無関心が環境の劣化に跳ね返り、劣化した環境に対して、関心を持つことができないし、また代償を払わなければならないという悪循環がみられると思います。

新しい世紀を迎える今、それぞれの都市に個性的な水環境の創出が求められています。その水環境は、多くの市民が愛着を持ち、喜びを引き出すことができる水環境でなければならないはずです。そのために、社会や社会を構成する個人が水とどのような関係を結んでいく必要があるのか、継続的に考えていきたいと思います。

（平成一二年一二月一日）

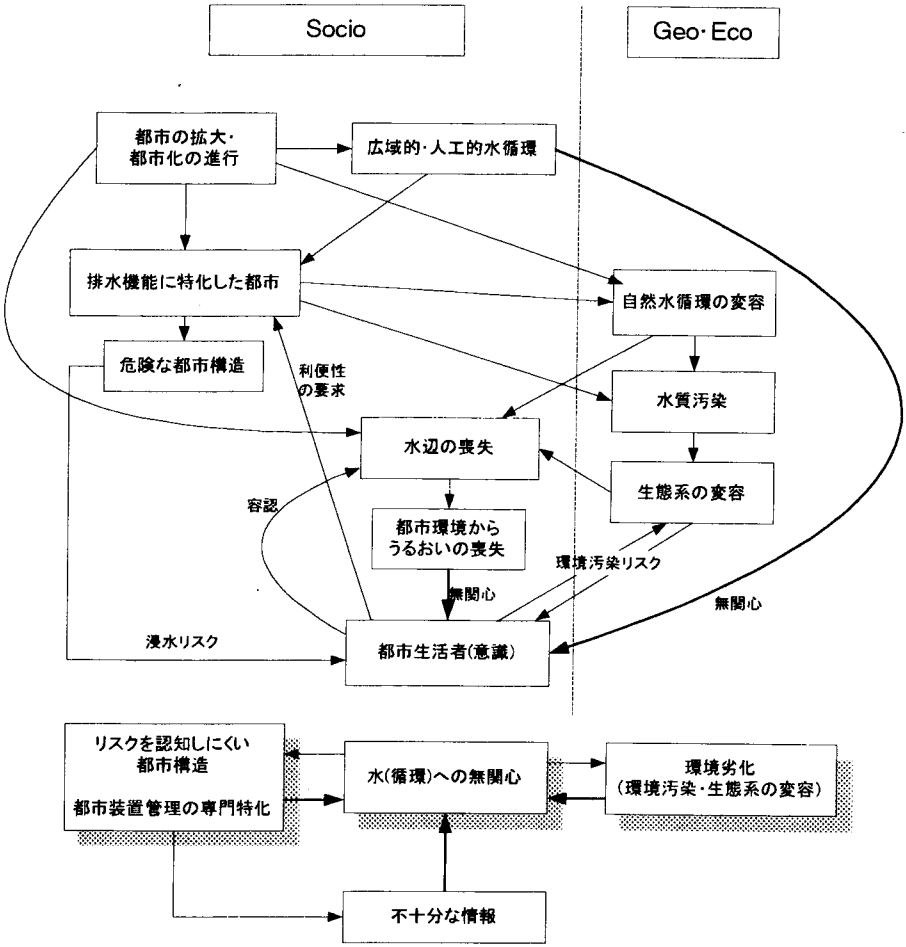

図　リスクを認知しにくい都市構造と都市生活者の意識

質疑・提言

◎　コンサルタント勤務ですが、水道局で環境会計を導入する時にパブリックコメントを求めたことがある。しかし、全然反応が無く、当局の担当者は情報公開とは言いながら市民はそれ程知りたいとは思っていないのではないかと言っていた。自分はそうは思わないが、反論するとすれば、どのようなことが言えるか。

谷口：行政がパブリックコメントを導入してから未だ二～三年しか経過していないので、その存在自体が知られていないのは事実だ。また、アクセス出来るインターネット利用者も二十四％と少ない状況にある。現在はまだ途上期なので、今反響がないからと言って不要だと結論づけるのは早計だと思う。

　アメリカは訴訟社会と言われるように市民からの行政訴訟が多かった。そこで思い切って情報を公開することにした。情報は公開を前提にしているので、作成にあたって理論武装されるようになった。このことが行政側の質を高める結果を生み、行政も自信を持つようになってさらに情報公開が進展すると言った良い循環が生まれた。

　したがって日本でも余り短兵急に評価を下さない方が良い。仮に少数であっても必要とする人が必要な時に情報をた易く得られるならば、それは非常に良いことだと考えたい。

◎　情報開示の時代といっても、どうでもよい情報は公開されるが、都合の悪い情報ほど公開されない。都合の悪い情報は公開されると困るので、データもとらないということすらある。このような現実をどう考えるか。

谷口：難しい質問だ。ただ言えることは、情報は発信するにせよ受信するにせよ一定の倫理が必要だ。しかし、なぜ都合の悪い情報は隠すのか。このことは考えなくてはならない。

行政は携わるべき分野について全てを行い、全ての責任を負わなければならないと考える傾向がある。従って、うまくいっている時は良いが、うまくいかない時は責任の重さを支えきれずに情報を出さないということは考えられる。しかしながら、これは言い換えるならば、コトはそれ程困難な課題だということでもある。そうであるならば、これからは課題解決が何故困難なのか、解決のための様々な代替案を思い切って公開して市民の理解を得ると同時に市民にも考えてもらい意思決定に参画する、つまり課題を共有し、共に考えるということが必要になって来るのではないか。

こうすることにより、行政万能論から脱皮できるし、ゴアが言っているような民主主義の熟成に繋がって行くと思う。

◎　国の情報提供でも環境庁はメイリングリストで流している。一方建設省はホームページに掲載するだけなので、見損なうと期限切れで意見を書き込めないということが多い。ＮＰＯやＮＧＯにはメイリングリストで流してもよいのではないかと思う。

また、妙正寺川で下水が流出していたので、下水道局に通知した。すると一日で対処する旨返事が来た。このような素早い対応は情報化時代ならではと感じている。

◎　萩原先生はモデル設定の過程でスケールメリットの破綻を克服する方法について、広域化の概念を取り入れられている。しかし、今こそローカルな思想、適正技術や中間技術の日本的展開が必要なのに、依然として広域化やスケールメリットの思想が背景にあるとすれば問題だと思う。さらに、どのようにしてインターからローカルへとシフトするかを考える時に、情報化による距離の克服は大きなヒントになる。そこで、情報化においても日本的な仕組みはどうすれば良いか聞か

せていただきたい。

萩原：私はスケールメリットは最早存在しない時代だと思っている。先ほど淀川流域の例を話したが、あれ自体は非常に分割されたものがつながっている。空間の違いをどのように克服していくか、これをネットワーク化することを考えている。淀川のどこかがやられた場合、よってたかってどう助けるかという思想だ。そういう意味では流域レベル、つまり川が見えるレベル、次にまちが見えるレベル―これはある意味では自立系レベルと言える―、次に人が見えるレベル、これは災害時における高齢者の動きについて今調べている。このように階層的には考えているが、スケールメリットについては追求していない。自立系がどう連携し、助け得るか、つまり、多様性と統一性という基本的に異なるコンセプトをどうシステムとして一体化していくか、多様性の中に地域性の特徴を盛り込んでいくことが重要なのだ。

◎　佐藤さんにお訊ねしたい。自分も土や緑に親しんでいたことを懐かしむ世代だ。過去の水路には土が堆積しているようだが、レベル的に自然流下で対応できたのか。流水の復活にはお金もかかるが、仙台の例では市の予算を使っても市民にメリットがあることを説明し、住民に意見も聞いたのか。

佐藤：一度失ったものを取り戻すことは難しい。農業の役割が終わった段階で溜め池をドンドン潰していった。しかし、溜め池には農業のみならず、河川の水を涵養する役割も持っていた。したがって、埋めて公園にした所でも水と土の関係は重要なので、もう一度掘ろうと提言した。

四ツ谷用水も埋められてから六十年も経過していたが、もともと四百年の歴史があるので、その間六十年はお休みしていたと考えたかった。位置エネルギーについては問題なかった。川との水

位差からは一つの水車で十ワットの豆電球を四百個灯せると計算された。したがって、水車を作れば光のページェントが出来る。また、豆電球のあるところには水車の存在の目印にもなる。

問題は水量だが、雨水貯留と組み合わせが出来ないか当局にも陳情した。企業が天水桶を設置して四ツ谷用水に流すことも検討している。処理場が遠いので、処理水の再利用は難しいが、町中にある湧水、これは下水道に流入しているので、これを誘導して用水に加えられれば一石二鳥になると考えている。

守田：水循環の回復に湧水の持つ役割は大きい。湧水が枯れたことから市民運動が起きたと思う。一方、行政は河川であれば予算が付きやすいが湧水だと付きにくいということがあって、とかく及び腰になるのではないかとの印象をもっている。水循環の補填というよりは湧水を戻すという目標の方が市民レベルでは受け入れ易いと考えている。

情報についてはいろいろな市民団体があるが、ホームページを開いているのは七・七％、Eメールをもっているのは一五％程度、情報手段を活用すればもっと連携ができるのだが、そこまでは行っていない。運動の主体は四十代から五十代以上の中高年の人たちが中心だが、家庭の主婦などが加わればその形態はもっと変わってくるだろう。

一方、情報化には危うい面もある。夏の河川で花火大会が三八〇回も開かれている。これは情報が入るようになると、あそこがやればこちらもやるといった日本人特有の横並び意識を刺激している例だ。情報化により、自ら考えなくならないようにしたい。

司会：議論は尽きないと思います。本日取り上げたようなテーマに対しては、簡単に結論が得られるようなことではないと思うのですが、まとめということで、以下のことを提案したいと思います。

二十世紀後半の人と水との関わりの希薄化は、都市生活者が「水」をひとりひとりの問題としてとらえることを妨げてきました。そのため、都市の水環境が様々な矛盾や問題を露呈しているにもかかわらず、多くの都市生活者が都市水害や環境汚染のリスクを認知することを困難にしています。

二十一世紀を間近とする今、それぞれの地域に持続的な水循環系を形成し、多くの市民から喜びを引き出すことができる水環境を創出していくため、これからの時代にふさわしい人と水との関係を創出していくことが急務となっています。私たちは、以下の目標のもとに、積極的に行動することが必要であることを水環境の健全化に関心を持つ多くの方々に提案します。

新たな人と水との関わりの目標

① 都市環境のなかでの「水」の位置付けの明確化

② 人と水との関わりを実感できる仕組みの導入

③ 水管理への市民の参加意識醸成

新たな人と水との関わりを形成するための行動

① 都市水環境創生を目指すネットワークを形成する。

② 水の捨て方・活かし方の伝統を採取し、広く伝播する。

③ 「水」に関する情報の受発信と共有化を図る。

④ 水循環構成要素としての下水道システムを提案する。

（平成一二年一二月一日）